

東ドイツに帰国した亡命ユダヤ人（5）

木 畑 和 子

6. 戦時下の難民生活と自由ドイツ青年同盟（FDJ）との 出会い

イギリスにキンダートランスポート（1938年12月から39年8月末）で送られてきた子供たちの新たな生活が開始されるとまもなく、第二次世界大戦が勃発した。戦時下の難民生活の中で、彼らは自由ドイツ青年同盟（FDJ）と出会い、それが戦後、彼らがソ連占領下のドイツに帰国する道につながった。本稿ではこの若き難民たちの生活とFDJとの出会いまでを扱う。イギリスにはさまざまな亡命者たちの組織があり、FDJはその内の一つであった。FDJ組織の概要やその活動については次回以降で扱いたい。

第三帝国下、彼らはもの心ついた時から、学校生活のなかでじかに反ユダヤ主義にさらされ、反ユダヤ主義政策のもとで、ドイツの学校教育から排除されただけでなく、映画・演劇・音楽会・美術館など文化生活を享受する機会も失っていた。ユダヤ人学校やシオニストの活動のみがかるうじて社会生活ともいえるものを提供していたが、それ以外では子供の内面的な成長に必要な機会をことごとく奪われていたのである。第三帝国でそのように一方的に迫害される立場であった彼らは、イギリスでは本稿でみるようにさまざまな苦難はあったものの、FDJによって仲間や学習の場を得たのみならず、ナチとの闘いの場をも得た。さらに彼らの中には、ドイツ共産党に組織されていった者も出てきた。本稿でのインタビュー対象者はキンダートランスポートの子供の中では比較的年齢が高く、里親など預かり先からの自立も早かったのである¹⁾。

男子の難民生活において重要な意味をもったのは、敵性外国人としての収容所生活と、ナチとの闘いの一つであるイギリス軍従軍であった

が、この収容所生活がそもそものFDJ活動の始まりだった。

大戦開始後しばらく「奇妙な戦争」といわれるような状況が続いたあと、1940年5月1日、ドイツ軍の西部戦線での電撃戦が開始された。イギリス政府と世論はドイツのフランス侵攻とその降伏（6月14日パリ陥落）に強い衝撃を受け、次に侵略されるのはイギリスだという恐怖に襲われ、パニックが起こった。またナチス・ドイツが容易に西ヨーロッパ諸国を征服できたのも、スパイや「第5列」がいたためという声があり、特にイギリスの海岸地帯にいる亡命ユダヤ人たちに、ドイツ軍の上陸の手引きをするのではないか、という事実無根の疑念がかけられた。そのため亡命してきたユダヤ人たちの16歳から70歳までの男女が敵性外国人とされ、約2万7000名が強制収容されることになった（初期の対象者は60歳まで²⁾。彼らの内カナダに約4400人、オーストラリアに約2500人が送られた³⁾。

本稿で扱った11人の内、4人が強制収容され、さらにその内の3人がカナダに送られた。中にはヴェルナー・ヘンドラー（⑨）のように、11月ボグロムではユダヤ人であるため、ザクセンハウゼン強制収容所に入れられ、イギリスではドイツ人であるため、強制収容された例もある。

この強制収容中、被収容者によって「収容所大学」とよばれるような文化的機会などが数多く設けられ⁴⁾、青年たちに教育が与えられるとともに、また政治運動への組織化が行われた。ドイツから亡命してきた政治家、芸術家、学者など多彩な人々が強制収容されていたことが、その背景であった。

難民男子には武器をもたない義勇軍（Pioneer Corps）やあるいは正規の軍人として従軍したものもいるが、この問題に関しても主に次回以降で扱いたい。

① ウルズラ・デーリング（1921年生）

彼女が里親のトーチ夫人のもとにいたのは18歳になるまでの半年間だけであった。開戦前、彼女は、ドイツからの亡命者の子供たち向けの幼稚園の先生として働いた。そこにはキンダートランスポートの幼い子供たちもいた。開戦後はロンドンの軍需工場で働いた。

FDJのことは、共産主義者であったおばから紹介されたイギリス人が教えてくれた。

② ヘルガ・エーレルト (1923年生)

最初、彼女は弟と一緒に宝石屋と質屋をいとなむエディンバラのおじ夫婦の家に住んだ。おじ夫婦が仕事を探してくれ、彼女はすぐに働き始めた。イギリスでは学校に行けなかったため、彼女は学歴もアビトゥアもない。彼女は縫い子見習いとして大きな洋装店で働くことになったが、そのオーナーはエディンバラ市長だった。彼は名士だったが彼女にきさくに話しかけてくれるなど、とても親切だった。しかし、戦争中のため、衣料品も配給制になり、贅沢な布も手に入りにくくなり、また注文も減って、縫製部門は閉じられてしまった。(以下、筆者のインタビューと、本に収録されたインタビュー内容とは、就いた職業に関していくつか異なる説明がなされている⁵⁾。彼女は難民としてさまざまな仕事に就き、その仕事の一部をそれぞれに語ったのだと思われる。仕事に就いた時期が具体的に語られていないため、ここでは併記する形で叙述する。本に収録されたインタビュー部分は【】でくくった。)

戦争中なので、すぐに次の仕事が見つかった。19歳ぐらいの時だったと思うが、製図道具(コンパスとか定規)を作る工場で働いた。工場では労働者の人たちとお互いによく理解しあったが、この工場もつぶれた。次は婦人服売り場で売り子として数か月働いた。【軍服縫製工場で働いた。軍服縫製工場で働くことはナチスに対する戦争への協力であり、満足していたが、騒音が激しく、健康を崩した。】戦争中で両親が送金できるような状況ではなかったし、両親との音信も途絶えた。弟は車両工場で働いた。

次の仕事を探したが、ちょうどそのころ、おじ夫婦たちも彼女たちのことを負担に感じるようになってきていた。狭い家に十代の子供二人を引き取るのは無理だったのだ。そこで、彼女たちはベルファーストの青少年難民担当委員会によって、北アイルランドのいわゆる「難民農場」(ユージェント・アリアーの農場)に送られることになった。この農場はユダヤ人青年たちのパレスティナ移住のための農業訓練場であり、ベルファーストのユダヤ人ゲマインデがダブリンのユダヤ人ゲマインデから経済援助を受けて購入したものだった。おじの親戚がその委員会に加わっていたのだ。その女性とはたった一度だったと思うが、手紙で連絡したことがあるだけで、会ったことがない。もしその親戚が、彼女たちが

農場に来てくれて嬉しいとでも一言、言ってくれば、どんなに幸せだったかと思う。そのことが彼女たちを苦しめた。あたたかな家庭で育ってきたため、そのような状況はとても悲しくて、本当によく泣いた。

彼女はその農場で1942年から44年まで生活した。彼女たちは戦争が終わったならば、両親と再会し、一緒にシカゴか南アフリカ、あるいはスペインに行くのだと思いこんでいた。スペインのフランコはユダヤ人を迫害していなかったのである。パレスティナに行く気持ちは全くなかった。しかし望むと望まざるにかかわらず、彼女はそこで農業に従事し、割り当てられた養鶏の仕事をしなくてはならなかった。鶏をしめてホテルに渡すのも仕事の内だった。弟は牛の飼育をした。農場には50から60人【120から130人】のドイツやオーストリアからの青年たちがおり、彼女はこの農場でユダヤ教徒としての生活を学び、いっそうユダヤ人としての意識をもつようになった。

彼女はここで養鶏業の資格をとったため、ドイツに帰国した際の手帳の職業欄には縫い子ではなく、養鶏業と書いた。養鶏は彼女のかつての夢であるジャーナリストからはほど遠い職業であったが、東ドイツでジャーナリストにならなくて済んだのは幸いだった。政府のお先棒をかつぐか、嘘をつくか、あるいは意見が違うということで、誠になっていたかもしれない。

彼女たちユダヤ人は、農場近くの敬虔なカトリック教徒の村人と交流があり、また駐留していたイギリス軍軍人とも交流があった。2年間の生活の後、弟はイギリス空軍に入隊した。志願した他のユダヤ人難民青年たちはほとんど歩兵部隊にしか入れなかったのに対し、彼女たちはポーランド国籍のため、敵性外国人とされず、弟は空軍に入隊できた。彼は戦後もイギリスに残り、銀行員として働いた。

戦争終結も近くなると、農場のメンバーが戦後を見据えて移動し、人数が少なくなったので、農場は機能しなくなってきた。彼女はマンチェスターの両親の友人一家を頼ってその地に移り、そこでお手伝いの仕事をすることができた。50人ぐらいを収容していたドイツ・オーストリア・チェコ・ポーランドからのユダヤ人青少年用難民宿舎の家事賄いの仕事であった。体が小さいので洗濯の仕事は大変だった。洗濯機が2台あったものの、多くのベッドカバーをブラシで手洗したのは、本当につらい仕事だった。給料は小遣い程度だった。【マンチェスターの軍需

工場で働き始めた。内務省の許可が必要だった。収入は週給2ポンド17シリングで、死ぬには多く、生きるには少なすぎる金額であった⁶⁾。】

マンチェスターのその知人がFDJのことを教えてくれた。

③ アルフレート・フライシュハッカー（1923年生）

彼はサウサンプトン近く、海岸沿いの保養地ボーンマスのホステルで、他に20～25人の難民の少年たちと暮らし始めた。ホステルの最初の責任者はYMCAから派遣された人で、2番目はドイツからの亡命者だった。その人はとても嫌な人だったが、3番目の人は教育者だった。彼は早く英語が話せるようにと夜間コースに通った。

1940年はじめには、難民も就労ができるようになり、ボーイ見習いの形でユダヤ人が経営するホテルで働いた。彼の髪は赤毛で、ユダヤ人と分かるので、ユダヤ人客からチップをもらい、お小遣いも得ることができた（彼によれば、赤毛は全体として少数ではあるが、ユダヤ人などに多いという。ちなみに彼の通称はジンジャー）。

この年の5月上旬、このホステルに住んでいたユダヤ人難民青年全員が敵性外国人として強制収容された。彼も5月12日、ホテルで午前中の仕事が終わりに、昼食をとっていた時、私服警官二人に突然連行された。16歳だった。彼はカテゴリーCに分類されたものの、海岸地帯に住んでいたため強制収容されたのだ。ボーンマスは入り江に位置し、特にドイツによる侵攻の危険性が高い地域とされていた⁷⁾。何人かはヒトラーの潜在的同盟者としてカテゴリーAに分類され、開戦と同時に収監された。さらにフランス降伏の数時間後には女性も含め、カテゴリーBに分類された人たちも、潜在的な「第5列」として強制収容された。

彼は他の人々と一緒にサウサンプトンからリヴァプールへ、それからマン島に送られた。さらにグラスゴーを経て、行き先も告げられず、大西洋を渡り、カナダのケベックに到着した。ケベックのスリーリヴァーではまず馬場のホールに宿泊し、それからニュー・ブランズウィック、シャープブルク、ファーナムと収容所を3回移された。約2年半の収容所生活であったが、このカナダでの収容所経験が彼をFDJの活動に導いたのである。

スリーリヴァーではドイツ軍捕虜と一緒にであった。イギリス政府はカナダ政府に、捕虜以外の人間も多く含まれていることをはっきりと伝え

ていなかったため、ひどい扱いを受けることになった。またニュー・ブランズウィックの収容所は、大急ぎで建てられたバラックで、まだ完成しておらず、700名の収容者に対して水道の蛇口が1つという状態であった。ヴェルナー・ヘンドラー (⑨) に会ったのもこの収容所である。

収容所では森から木材を切り出したり、木工所の仕事をしたりしたが、彼をはじめとする青年たちは、この収容状況に対する疑問から政治に対する関心を強めていった。年長の老練な政治家たち（そのなかにはドイツ共産党やドイツ社会民主党の元国会議員、ウイーンの著名な社会主義理論家などがいた）が、彼らの疑問に答えてくれた。また共産党員が収容者のなかの知識人、音楽家、政治家を組織して、さまざまな催しをして、16、7歳の若い世代に教育を施してくれた。娯楽に関していえば、カナダ政府は収容所内の平穏さを保つことを重視していたので、音楽会を催したり、スケート場を作ったりいろいろなことをしてくれた。ニュー・ブランズウィックでは劇団が結成されたし、楽器を習いたいという希望があれば、それもかなえられた。

社会民主党の人々に比べ、共産主義者は熱心に青年たちに働きかけた。彼らは週1、2度なぜヒトラーが政権についたか、なぜ第二次世界大戦が起こったかなど身近な政治問題から教育をはじめた。フライシュハッカーの育った家庭では、子供を政治の話に加えるのを好まなかったもので、彼はこの収容所ではじめて政治に関心を引き起こされていった。

1941年6月21日ファーナムに移った。独ソ戦開始の日なので、日付はよく覚えている。ファーナムでは再び戦争捕虜扱いされたため、収容所では戦争捕虜と政治亡命者を分けて収容することを求める運動が起こった。当局との鋭い対立の中で、活動的だった7人が「共産主義的首謀者」として手荒なやり方で隔離された。彼らのなかにはドイツ共産党元国会議員も一人いたが、他は共産主義者ではなかった。ほとんどの収容者が怒って収容所の門へおしかけ、その様子にパニックにおちいった看守が威嚇射撃を行う事態までにいたった。ハンストを行えば、カナダ政府、そしてイギリス政府に報告が伝わるであろうというもくろみは見事に功を奏し、ハンスト後、ようやく第三帝国の軍人と第三帝国からの亡命者とは別に収容されることになった。

これは彼にとって日常における政治と政治的闘争というはじめての体験であり、彼はその体験に魅了された。FDJはすでにロンドンで創設さ

れていたが、ファーナムにも設立され、彼もそのメンバーになった。また、強制収容から釈放された後は、ロンドンのFDJの運動に加わるようになった⁸⁾。

イギリスの収容所では、義勇軍参加と釈放が組み合わされ、釈放されたければ義勇軍に参加するというやり方がとられたため⁹⁾、共産党は反対したが、カナダではそのようなやり方ではなかったため、義勇軍参加が積極的に呼びかけられた。

42年カナダ兵とともにイギリスに戻った。一緒に戻った人々の内、何人かは釈放されたが、彼はそのまま再びマン島へ収容され、ようやく同年10月に釈放された。彼はイギリス軍に入隊を志願したが、却下された。共産主義者とみなされた者は却下されたという説もあるが、フライシュハッカーによれば、そんなことは決してなかった。ヘルツベルク（本稿^⑩）は従軍できたし、なぜ自分が従軍できなかったか分からないという。

ロンドンで彼はファシズムとの戦いに全力をささげるために、軍需工場で働いた。軍需工場では人を求めているので、すぐに仕事が得られた。母のいとことは強制収容される前に1時間ぐらい話したことがあるだけだったが、その工場で真鍮を扱う金属工として戦争終結まで働いていた。

④ クルト・グートマン（1927年生）

彼が生活したユダヤ教の孤児院はグラスゴーの非常に貧しい地域にあり、地元の子供たちにX脚やO脚が多くみられた。孤児院の責任者夫婦は無愛想で子供好きではなかった。孤児院には2、30人の子供がいたように思う。次兄は5年間の孤児院生活で名前がフリッツからフランクに変っただけではなく、すっかりエゴイストになっていた。弟に対してやさしい言葉もかけず、いつも距離をとり、またいじめた。兄は弟に対して目立たぬように、そして他の子供より10倍よい振る舞いをし、30分早くベッドに行くように命じた。孤児院の生活自体非常に厳しく、遊び時間もなく、ユダヤ教の戒律にのっとった生活を送らなければならなかった。また彼はヘブライ語をほとんど読むことができなかったため、トーラーの暗誦などが非常に難しかった¹⁰⁾。

空襲のために孤児院の子供たちはイングランドとスコットランドの境

の小さな漁村に疎開した。兄弟をあずかってくれたパン屋の主人が、兄が彼をなぐったりいじめたりするのをみて、兄を別の家に住ませるようにしてくれたため、彼にとってようやく子供時代といえる時が始まった。パン屋の主人は大変親切で、彼を養子にしようと言ってくれた。しかし母親の運命もまだ分かっていないと、孤児委員会の反対を受けた。このパン屋の主人は、後彼が17歳で軍に志願した時、それを誇りにしてくれた。

彼はグリーンナク近くのユダヤ人の疎開児童宿舎に入り、42年までいた。教師には反ユダヤ主義だけは否定しているものの、ほとんどファシストのようなハンガリー出身のユダヤ人やシオニスト、共産主義者までさまざま人がいた。彼は10年生を終了後、グラスゴーに戻り、ナチとの戦争遂行にとって重要な産業で働きたいと考えたが、孤児院委員会はグラスゴーの仕立屋の見習いの職を斡旋した。グラスゴーで他の難民と知り合い、その人の紹介でようやく軍需工場での旋盤工見習いの職を得ることができた。このグラスゴーで彼はFDJを知ることになる¹¹⁾。

⑤ ヘラ・ヘンドラー (1923年生)

14歳と15歳の彼女たち姉妹はブライトンの未亡人宅に着いたものの、彼女たちの荷物はイギリス到着当初から行方不明になっていた。荷物は結局3か月後に彼女たちの手元に届いたが、それまで水着を着ては下着を洗濯する日々が続いた。その水着はハンブルク駅での別れの際、母親が何を思ったか、突然リュックに押し込んでくれたものだった。ドイツからは10マルクしかもち出せなかったし、未亡人が下着を買ってくれるようなことはなかった。

彼女はエジプトの鉄道関係の植民地官僚の未亡人で、息子も結核で死亡しており、一人暮らしだった。未亡人はとても親切だったが、おそらく難民委員会から支払われるお金を年金の足しにしようとしていたのだと思う。彼女はいつも難民委員会が彼女たちに支払う金額が少ないと愚痴をこぼしていたので、ヘラたちは難民委員会から渡される毎週6ペンスのお小遣いを遠慮した。母親には毎日のように手紙を出したかったが、切手代にも事欠き、手紙がなかなか出せなかった。そして戦争が勃発すると母に手紙を出すことはできなくなった。

小さな子供を二人引き受けるつもりだった未亡人宅には狭いベッドが

一つあるだけだった。到着した当初は暖かいこともあって、最初の内は一人が床に寝た。また未亡人宅では1週間に1度ラムの肩肉を焼き、次の日から冷えた残りの肉をずっと食べ続けるような生活だった。食事の量も少なく、また塩茹での野菜が口に合わず、食べ盛りだった彼女たちはいつも空腹だった。未亡人は少食で、十代の少女たちはもっと食べるということが分からなかったようだ¹²⁾。

学校に通ったことは、とてもすばらしいことだった。そのすばらしさを妹は別のインタビューで語っているが、彼女はイギリスで本当の学校とはどのようなものかはじめて知った¹³⁾。学校には彼女たちの他にもう3人のキンダートランスポートの子供（オーストリアとハンブルクからの女の子）がいた。ドイツからイギリス王妃に引き受けてもらえないだろうかと手紙を書いて、助けられたという。彼女は筆者に、そういった話を聞いたことがありますか、こんな風に助けられた人もいたんですよ、と語ってくれた。

彼女は1940年5月までその学校にいた。ドイツ軍の空爆が始まり、16歳以上の難民女性は海岸地帯から離されることになった。未亡人は彼女に庭師関係の仕事などを探してくれたが、結局みつけることができなかった。彼女は一人でケンプリッジ¹⁴⁾に移り、まずジャム用のゲースベリー摘みをしたが、作業用手袋をもっていなかったので、つらい仕事だった。次のロンドンのホステルの仕事をへて、彼女はユダヤ人の乳児院で子供専門の看護婦見習いとなった。しかし空襲が激しくなって、乳児院が疎開した際、勤めて日の浅い彼女と一緒にいくことはできなかった。ブルームズベリーハウス（難民委員会）に仕事を紹介してもらったが、紹介された家事やベビーシッター、店の手伝いの仕事などはしたくなかった。

彼女は何か勉強がしたくて、オックスフォードで看護婦の教育を受けなかった。しかしブルームズベリーハウスはなかなかそれを認めてくれようとしなかった。そこで彼女は彼女たちの行方不明になっていた荷物の件を担当してくれたオーストリア出身の裕福なユダヤ人、ジョセフ夫人のところへ行った。気後れして、夫人の家のベルを鳴らすのをしばらく躊躇してしまった。

夫人がブルームズベリーハウスに一緒に行って、口ぞえしてくれたため、ようやくオックスフォードの看護学校で看護婦見習いになることが

できた。ジョゼフ夫人はブルームズベリーハウスのスポンサー的な存在だったのだ。

彼女は、本当は児童心理学者になりたかった。とはいえそれがどのようなものか、はっきりと分かっていたわけではなかった。当時女性が就ける仕事は看護婦が多く、難民が就ける仕事はその内でも結核などの伝染病棟・精神病棟とか、イギリス人が就きたがらない仕事が多かった。

人の慈善に頼る生活に困難を感じていた妹も同じく学校を離れ、縫い子見習いとなった。経済的にはまだ難民委員会に依存する生活ではあったけれど、少し稼げるようになった。オックスフォードの伝染病棟で看護婦見習いの仕事を見つけることができたヘラは、妹にオックスフォードでの仕事を探し、そこで姉妹は合流することができた。妹もここで少し収入が増えた。経済的な自立ができたと思っていたが、後彼女はヘラが自身の乏しい収入の一部を家賃にこっそり足してくれていたことを知った。ヘラは44年に8月に看護婦試験に受かったが、まだ大病院で働けるような資格ではなく、さらにロンドンで2年間実習をした。

彼女はイギリス人の家庭にも、ユダヤ人家庭にもほとんど招かれたことがなかったが、ユダヤ人家庭の方がより少なかった。イギリスにいるユダヤ人の多くがイギリスに定着してから日が浅いということもあると思うが、自分たち難民の青年たちがユダヤ教徒であり続けることに関心を払うべきであったのにもかかわらず、自分たちに心を配ることは少なかった。これが今でも彼女の心にひっかかっている。

1942年にカナダから戻ってきた人々によって創設されたオックスフォードのFDJに入ったが、孤独だった彼らにとって、そこでの活動は非常に楽しかった。

⑥ ギゼラ・リンデンベルク (1925年生)

彼女が入ったピーターズフィールドの寄宿舎では皆とても親切だったが、最初は言葉が分からなくて大変だったし、また家族がどうなっているか心配で、泣かずにベッドに入らない日はなかった。このことは、誰にも気がつかれなかったと思う。彼女は一人っ子だったので本当につらかった。保証人のおじの知人が休暇に招待してくれるなどしたが、その頃が彼女の一番不幸な時代だった。

学費を払ってくれたスウェーデンの親戚はドイツのノルウエー占領に

危機を感じ、アメリカ（アメリカには父の妹がいた）に出国してしまったので、経済的に続かず学校を辞めざるをえなかった。奨学金のことなど知っていれば学業も続けられたのに、そのようなことは分からなかった。

多くのユダヤ人難民が強制収容されていた時期、彼女は15歳だったのでその対象外であった。彼女はロンドンに出て働き始め、週末にはタイプを習った。難民が就ける仕事は軍服を縫ったり、人形の詰め物をいれたりする低賃金労働だった。このような「難民の仕事」は口コミで得たものだった。彼女の家族と親しい人の夫婦の家に寄せてもらったが、その後FDJにいりびたっていた友人の紹介でFDJを知り、18歳の時彼女もメンバーになった。

⑦ インゲ・ラメル（1924年生）

1940年6月、シェフィールドで学校生活を送っていた彼女は敵性外国人として強制収容された。他にもユダヤ人難民の生徒がいたにもかかわらず、16歳（5月に誕生日）になったばかりの最年少の彼女だけがマン島に6週間収容された。

学校から警察の車でシェフィールドの刑務所に収監される時、教師たちは呆然として彼女を見送った。責任感からか、何ともいえぬ悲痛な面持ちで立ちすくんでいた教師の姿は決して忘れられない。彼女は敵性外国人かどうかをめぐって審問を受けるようなことはなかったが、強いショックを受けた。強制収容中は台所仕事をさせられた。鉄条網に囲まれていたが、そこまでの悪い記憶はない。クラスメート全員が彼女に手紙を送ってくれた。彼女が早期に釈放されたのも、おそらく彼女を預かった教師の尽力であったと思う。

卒業後、ブリストル（イギリス南西部）の孤児院で2年間、保母と幼稚園教諭の見習いの職を得た。43年にロンドンに行き、乳児院や幼稚園で働いたが、空襲があれば子供を防空壕に避難させたりしなくてはならず、小柄な彼女には負担だった。そのため彼女はソーホーの皮革工場に仕事をかえた。孤児や困難な状況にある子供の環境を体験したことにより、彼女は社会問題にめざめていった。その状況を訴えるために、王妃に手紙を書こうと思ったくらい当時はナイーブだった、と彼女は笑う。

FDJにはすでにシェフィールドで誘われていたが、あまり関心も

てなかった。ロンドンでは自由ドイツ文化同盟(Freier Deutscher Kultur Bund、FDKB)と自由ドイツ運動(Freie Deutsche Bewegung、FDB)に参加した。リベラルではあるが、政治の話はほとんどの家庭で育った彼女は、ファシズムの経験やまたロンドンの託児所で社会的悲惨さを経験したこと、また共産主義者の亡命者と知り合うことによって、政治問題への関心を深めていった。庭師になった姉とは、シェフィールド以降一緒に生活できなかったが、よく会った。庭師として郊外に住んでいたのも、姉がこのような組織に入るようなことはなかった。

⑧ マリアンネ・ピンクス (1924年生)

彼女はロンドンの里親の「おじさん」と「おばさん」のもとで娘扱われた。部屋も与えられ、メイドもおり、物質的にはめぐまれていたが、14歳の彼女は里親とはうまくいかなかった。イギリスに着いたばかりの時、里親から「そのひどいブラウスを替えて頂戴」と言われたこともあった。

カーディフで住込みのメイドの職を得てイギリスに出国してきた母は、来客時には制服を着させられ、食事は残りもののような状態だったので、我慢できずロンドンに移ってきた。所持金も何もなかったが、友人のところへ泊めてもらい、メイドの仕事を得ることもできた。しかし里親はその母と会うのを邪魔したりした。母は昼に休みがとれたが、マリアンネの入浴の時間も昼だった。入浴後の数時間は風邪を引くと言って外出が許されなかったので、母には会えなかった。その家ではタンクにお湯がたまらなるとバスタブにお湯が入れられないので、「おばさん」が朝、「おじさん」が夜入り、昼が彼女にあてられたのである。

その家にいた20代後半ぐらいのメイドはとても良い人で、彼女はその人と話すのが楽しみだった。一緒に散歩に行ったこともあったが、そのメイドと仲良くすることも里親に嫌がられた。このメイドも戦争が始まると実家に戻ってしまい、「おばさん」と過ごさなければならなかった。「おじさん」の両親が近所に住んでいたが、その人たちはとても親切だった。「おじさん」の父親から古典英語の授業を受けた。またその夫婦が毎週1シリングをくれたので、それを母のために貯めた。

両親は里親に彼女に何か教育を受けさせることを頼んであった。彼女は子供と関わる仕事で幼稚園教諭か保母になりたかったので、保母養成

学校へ通った。しかし戦争が始まると、まだ学校に行き始めて数か月しかたたないのに、経済的に余裕がないからという理由で行かせてくれなくなった。絵の才能があると「おじさん」が言い、自分にもそう言い聞かせ、夏には補習学校の芸術コースに入ったが、これは貧しい人々のための学校で肌が合わず、孤独だった。彼女がその学校に行く時の食事代やあるいは映画に行くようにと与えられたお金も、母のために貯めた。食事を抜いたこと、またその家が非常に寒かったこともあって、病気になり入院した。

彼女は自分の監督責任にあったクエーカーの団体に里親とうまくいっていないことを訴えた。担当者と面接をし、養母とうまくいっていないことが認められた。入院中にドイツ軍のオランダ侵攻のニュースを聞いた覚えがあるので、これは夏のことだったと彼女は回想している。結局、里親のもとには1年余り一緒住んだだけだった。それはひどい別れ方でもないが、愛ある別れ方でもなかった。「おじさん」はその後、彼女の結婚式にきてくれたし、彼女の夫（最初の夫。ドイツ帰国後、事故死）のことをとても気に入ってくれた。

彼女は母の勤め先の老婦人のもとへ行き、一緒に住むことができた。また成人学級のようなところで、速記とタイプを習った。体が不自由な老婦人は、空襲の際地下鉄ホームに避難することができなかったため、疎開することになった。母と一緒に彼女も老婦人の疎開先に行った。疎開先で老婦人の娘の事務所の手伝いをしたこともあったが、速記とタイプを使えたのが嬉しかった。

ロンドンに近い町に疎開していた時、マリアンネは寂しかったのでキングダートランスポートで荷物をたくさんもって一緒にきた友だち¹⁵⁾とロンドンでしばしば会った。その友人は労働者階級の家庭に引き取られていた。その家庭は好きにさせてくれたが、食事の量が少なかったという。

その後、老婦人の健康状態が悪化して、老人ホームに入ったため、母は仕事を失い、二人でロンドンに出てきた。ロンドンにはさまざまな亡命者のグループがあった。友人のそのまた友人が加わっていたシオニストグループに誘われたこともある。後その友人はシオニストになった。FDKBにも彼女が連れて行ってくれた。マリアンネはそこで秘書の仕事をするようになる。そしてそのメンバーの一人がFDJの集まりにつ

れていってくれた。

⑨ ヴェルナー・ヘンドラー (1920年生)

彼は敵性外国人としてカナダの収容所に送られたが、一日の食事の量が非常に多かったために太った。収容所には木工所もあり、そこでは収容者としてより、むしろ反ファシズム抵抗運動家として働いたつもりだ。彼は「トラブルメーカー」(ドイツ共産党のスポークスマンのような役割)だったため、1942年夏カナダからイギリスに戻されても、マン島に収容され、なかなか釈放されなかったという。

釈放後ロンドンの個人の家庭に身を寄せて、木工所で約1年半働いたが、その間にFDJのメンバーになった。

⑩ ウルズラ・ヘルツベルク (1921年生)

ロンドンに住む父方のおじは商人で、彼女の生活費用を保証してくれた。彼女が18歳になった時、難民としての労働許可が与えられるようになったので、1939年か40年から働き始めた。最初は薬局で、それから看護婦見習いの仕事についた。フランス降伏のパニックのなかで、彼女は強制収容こそされなかったものの、「敵性」外国人として病院からわずか2時間の猶予で出なくてはならなかった。

彼女は看護婦の寮に住んでいたため、どこにも行きようがなく、難民委員会に助けを求めた。そこにはすでに数えきれないほど多くの若い人たちがきていた。そこで、4週間ほど女子寮に入り、家事見習の仕事、クリーニング屋の受付などをした。おじの負担になるのが嫌で、おじのもとには戻りたくなかった。

フランスの敗北によって開戦当初の「奇妙な戦争」期からイギリス政府の姿勢が変わり、愛国心やファシズム国家との戦いへの団結意識がイギリス全土に燃え広まった。彼女は婦人部隊に志願したが、ドイツ人であることから拒否された。その代わりに軍需工場で働くことを考え、1940年か41年、金属工になるためレスターにある職業訓練センターに入った。イギリスは軍需工場への労働力が欲しかったため、看護学校でもどこでも皆とても親切だった。9か月の訓練期間で、金属労働者に関わるすべてを学んだ。

彼女はレスターで、ドイツからの亡命者と接触をもつことができ、さ

らにユダヤ人難民の青年運動に加わることができた。ドイツにいた時すでにユダヤ人青年ブンド（リベラル派のユダヤ人青年運動）のリングに入っており、イギリスではそのような運動にかかわれないことが、とても寂しかったのである。母親のみならず、クラスメート、ユダヤ人青年組織での友人たちすべてをドイツに残して、イギリスに渡って以来、彼女の苦しみを共有するような場はなかった。イギリスではまわりにいた人たちは年上の人がほとんどで、当然のことながらイギリス人だけだった。仕事では一人前扱いされ、看護婦見習い期間中、生活は非常に厳しく律せられていた。

レスターには多くのドイツ・オーストリア・チェコスロヴァキアからのユダヤ人亡命者がおり、その人々のクラブや国際主義的青年グループがあった。彼女が以前ドイツで入っていた青年団と同様に、講演・コンサート・朗読・議論の夕べ・週末のハイキングなどの活動を行っていた。両親から離れ、同じ運命を分かち合っていた多くの若者はこの団体に帰属意識をもち、そこで心の安らぎと我が家のような落ち着きを得られた。彼女が加わったこの国際主義青年団から、レスターのFDJが生まれた¹⁶⁾。

⑪ ハンス・ヘルツベルク（1921年生）

彼は18歳の時、ハンブルクから飛行機でイギリスに渡った。ユダヤ人たちが列車でオランダ国境を通過する際のナチの嫌がらせが、経験した人からドイツに残った家族に寄せられた手紙で、よく知られていたため、父親が飛行機の切符を買ってくれたのだ。

ロンドン到着後、父の知人のところで、2日間泊まらせてもらった。ドイツから10マルクしかもち出せなかったので、知人に地下鉄に乗るお金をもらい、ブルームズベリーの難民事務所に行った。そこで銀行家ロスチャイルド家の庭師見習いの仕事を得ることができたが、まるで大きな公園のようなすばらしい庭だった。

19歳の彼も突然敵性外国人として強制収容された。彼はイギリスに批判的なことをしたこともないのに、敵性外国人とされることは本当におかしいと思った。収容者の中には、スペイン内乱の際の国際旅団に加わった人もいた。しかし、イギリスのFDJ活動の基盤となった多くの青年がそうであったように、ブルジョア出身の彼もこの強制収容中に共産

主義者の影響を受け、人生が大きく変わるようになった。

人種主義による迫害を受けた彼は、他の青年と同様に、最初は政治的迫害のために亡命した人々と接しようとはしなかった。その人たちは親切だったが、それまでの体験から、「アーリア人」でブロンドの青い目の人はナチではないか、と疑う気持ちが染み付いていたのである。しかし、鉄条網の中でも毅然とした姿勢をとっていたその人たちは、収容者のなかでも際立った存在だった。第三帝国ではナチがそういった人々を刑務所や強制収容所に入れ、拷問したのである。そうしたことから、彼らはこの非ユダヤ人たちに注目するようになっていった。

体や衣服を常に清潔にしておくこと、だらだらせずに自分を有為なものにすることが非常に重要だということをその人たちから学んだ。その人たちの他に誰があんなに忍耐強く自分たちのことを気にかけてくれ、質問に答え、意見に答えてくれただろうか。この仲間によって、父親のようなまた人生経験をつんだ友人を見つけたのだ。ファシズムの犠牲者というよりもむしろ意識的にファシズムと戦うこの人々に魅力を感じたと彼は回想している。

ドイツに残った両親の運命も分からない彼のような青年にとって、自分たちに関心をもってくれた人はとても大きな意味をもった。また、このようなことで、逆に彼はユダヤ教とは関わりをもてなくなった。一度サウサンプトンでシナゴグに行った際、とても歓迎され、金曜の夜サバトによばれたことがある。しかしラビ夫人が鶏肉をとり分けた時、ラビには多く、若い彼には少なく渡した。これはユダヤ教のヒエラルヒーに従って順に取り分けたためによるものであるが、それを経験した彼は二度とシナゴグへ行こうと思わなくなったし、以来ユダヤ教とも関係がなくなったのである。

強制収容ではまずリヴァプールの兵士の訓練場に入れられたが、そこはトイレも水道栓も少なく、非常に不快な環境であった。ベッドに座って、政治的亡命者と青年たちが話し合った。最初は政治についてはなく、文学について話し合った。一人が彼に話しかけてきて、ドストエフスキーやゴーリキーを読んだことがあるか、ロシア文学を知っているかなどと尋ねた。彼はその質問に侮辱されたような気がした。読んではいたが、理解してはいなかったのだ。それから政治の話をした。話しかけてきたその人はドイツ革命に参加し、ナチ時代になってチェコへ亡命

し、ポーランド、ノルウェー経由でイギリスに渡ってきた人だった。

その後、収容者全員がカナダに送られ、スリーリヴァーに収容された。その地のカナダ騎馬警官は頑迷なナチの捕虜が送られてくると言い聞かされていたので、ひどい扱いを受けた。彼は捕虜になったドイツ海軍の兵隊が「ユダヤの血が刃先にほとぼしる時 Und wenn das Judenblut vom Messer spritzt」と反ユダヤ主義の歌を歌っているのを聞いたことがある。ナチの兵隊と一緒にされたくないと座り込みストライキをし、収容者の団結が強まった。

ヘルツベルクたちは強制収容中、本を通してではなく、議論を通して共産主義の影響を受けていった。ドイツ史の講義や労働運動史の講義も受けた。収容者の中には非常に教養ある人々がいた。ナチと闘い、ナチの強制収容所に入れられ、さらに非合法で闘い続けたそのような人々に彼は強い感銘を受けた。

収容所は、共産主義者たちが長い間の非合法活動中にはコンタクトがもてなかった多くの若い世代と接触し、自分の陣営に引き込む場ともなった。一方、彼によれば著名な社会民主党員の幹部たちは英国労働党の力添えによって、強制収容された人が少なかったという。

家族から切り離された彼は、ここで新たな家族を見つけ、そして人生の真の大学に行ったと考えている。彼は、誰がなぜナチを政権につけたかということや、反ユダヤ主義や外国人憎悪の意味するものなどについて、新たな視点からドイツの歴史を学んだ。彼はまたファシズムに対する抵抗運動や国際的団結の意味や目的も学んだ。

その間、イギリスではこうした強制収容への批判の声が強まり、釈放が始まった。彼も釈放され、レスターでは農業に従事することになった。1941年末のレスターにはまだ国際主義青年組織があった。

彼はイギリス軍に志願した。多くのFDJの共産党員はイギリス軍への志願を拒否されたが、彼は兵隊になることができた¹⁷⁾。

注

- 1) 「連載(1)」(『成城文藝』第195号、2006年6月)145頁。ただし同「連載(1)」に書いたように、⑨ヴェルナー・ヘンドラー、⑩ウルズラ・ヘルツベルク、⑪ハンス・ヘルツベルクはキンダートランスポートではなく、別のルートで渡英した。また⑦のインゲ・ラメルはFDJの会員ではな

い。

- 2) クシュナーはこの強制収容が単なるパニックによって行われただけではなく、その背景には難民やユダヤ人に対する偏見が広汎に存在したことを指摘している。また彼は強制収容された人数について、2万7000人、あるいは難民のおおよそ半分という数字を挙げている。Tony Kushner/Katharine Knox, *Refugee in an Age of Genocide. Global, National and Local Perspectives during the Twentieth Century* (London/Portland, 1999), 173.
- 3) 当時のイギリスには約7万3000人の「敵性」外国人がいるとされ、彼らは治安上非常に危険とされるカテゴリーA (569人)、疑わしいとされるカテゴリーB (約6700人)、問題なしとされるカテゴリーC (約6万3000人) の3つのカテゴリーに分けられた。Aは戦争勃発時に逮捕されたが、フランスの降伏とともに結局BとCを含む人々の強制収容が行われたのである。ただしこの分類はきわめて厳密さを欠いたものであった。

彼らの一部は海外(カナダ・オーストラリア)に送られた。カナダへは独逸のカテゴリーB、カテゴリーCの2290人、民間のイタリア人407人、カテゴリーAの2108人が送られた。なお、カナダに送られたカテゴリーAの人々には捕獲されたドイツ船の乗客も含まれたため、上述のカテゴリーAの数をはるかに超える人数となっている。David Cesarani/Tony Kushner (ed.), *The Internment of Aliens in Twentieth Century Britain* (London, 1993), 45, 113; Walter Laqueur, *Geboren in Deutschland. Der Exodus der jüdischen Jugend nach 1933* (Berlin/München, 2000), 293, 298; François Lafitte, *The Internment of Aliens* (London, 1940, 1988), 62-65, 72, 74.
- 4) Henry Bernhard, Die Geschichte der FDJ in Großbritannien 1939-1946. *Deutschland Archiv. Zeitschrift für das vereinigte Deutschland*, 38. Jahrgang 2005, Nr.1, 38.
- 5) Mario Keßler, *Exilerfahrung in Wissenschaft und Politik: Remigrierte Historiker in der frühen DDR* (Köln u. a., 2001), 172-175.
- 6) Keßler, *Exilerfahrung in Wissenschaft und Politik*, 175.
- 7) Alfred Fleischhacker (Hrsg.), *Das war unser Leben, Erinnerungen und Dokumente zur Geschichte der Freien Deutschen Jugend in Großbritannien 1939-1946* (Berlin, 1996), 12-13.
- 8) Fleischhacker (Hrsg.), *Das war unser Leben*, 14-15.
- 9) Louise London, *Whitehall and the Jews 1933-1948. British Immigration Policy and the Holocaust* (Cambridge, 2000), 171.
- 10) Kurt Gutmann (Hrsg.), *Wer möchte nicht im Leben bleiben... über Kurt Gutmann* (Berlin, 2006), 22-24.
- 11) Gutmann (Hrsg.), *Wer möchte nicht im Leben bleiben...*, 25-26, 28, 30, 32.
- 12) Mark Jonathan Harris/Deborah Oppenheimer, *Into the Arms of Strangers*.

Stories of the Kindertransport (New York/London, 2000), 128–129.

- 13) Harris/Oppenheimer, *Into the Arms of Strangers*, 213–214.
- 14) ケンブリッジも海岸地帯に指定されており、16歳から60歳のすべての独逸出身の男子は強制収容された。Lafitte, *The Internment of Aliens*, 70. ヘラ・ヘンドラーがケンブリッジに移った理由がこの強制収容と関係があるのかは不明である。
- 15) 「連載（４）」(『成城文藝』第200号、2000年9月), 166頁。
- 16) Fleischhacker (Hrsg.), *Das war unser Leben*, 99–101, 103.
- 17) Fleischhacker (Hrsg.), *Das war unser Leben*, 90–91.

(本稿は2007年度成城大学文学部特別研究助成金による成果の一つである。)